

大豆ねむり病の分生胞子の飛散状況と薬剤散布の方法

小林 研 三\*

KOBAYASHI, K. The Spore Dissemination of Soybean Blast Fungi  
*Septogloeum sojæ*, and the Control Method by Fungicides.

分生胞子の飛散状況については既に木下，西沢によ

つて調査しているが，この場合，本病の伝染経路の一つである種子伝染により観察されている。本報は被害茎葉による場合の分生胞子の飛散状況を調査し，併せ

\*熊本県農業試験場

て、薬剤散布の方法について検討した。薬剤はダイセーン粉剤により、散布時期と回数とを組合せて観察したもので、一応ここに報告する。

### 試験方法

#### I. 分生胞子の飛散状況調査

場所：熊本市上ノ郷町農試圃場，畑6アール，期間：昭和33年4月1日～昭和33年7月25日，方法：常法により胞子採集器を高さ5，10，20，40，80cmの5段階に設置し高度間の胞子数の差を併せて検討した。試験圃の概況。土壤表面に被害莖葉接種，2月1日，前年被害が甚しい莖を細片し，1/30アール当り300grを放置した。夏大豆種子5月1日播種，品種：白莢一号，発病調査5月28日，6月9日の2回，1plot50株調査

#### II. 薬剤散布に関する試験

場所：熊本県阿蘇郡高森町，前年大豆栽培，品種：夏大豆，白莢一号，散布薬剤：ダイセーン粉剤，散布量：10a当り4kg～3kg，機具：手回散粉器，

試験区：1. 開花2回，2. 開花1回，3. 幼莢2回，4. 幼莢1回，5. 開花幼莢2回，6. 開花2，幼莢2汁4回，7. 開花1幼莢2汁3回，8. 開花2幼莢1汁3回，9. 対照無散布区：1区10坪3連制，

発病調査：1区50株を発病基準によつて調査，8月1日。

#### 試験結果

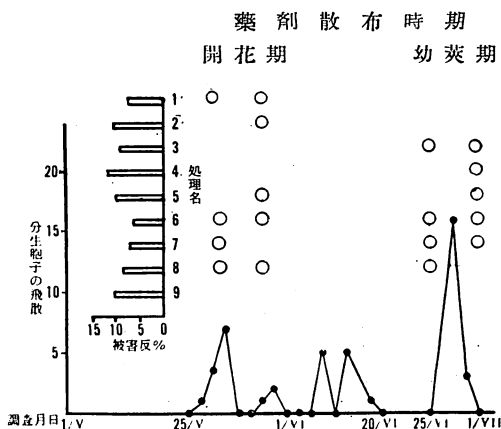
高さによる胞子採集状況は第1表の如くである。昭和33年5月25日～7月1日。

第1表 胞子飛散状況調査(高度)

高度	5cm	10cm	20cm	40cm	80cm
胞子数	10	8	5	6	4

試験結果によれば，被害莖の場合と種子伝染の場合とを比較すると大体同様の傾向を示すが，発生は幾分被害莖葉の場合が早い様であつた。大体，開花期幼莢期に最大胞子数を数えている。最盛期中に胞子数が少かつた日々は概ね快晴の時であつて，胞子の飛散は当日の天候，特に風によるものが大きい。本試験の結果，高さによる差違では低い場合が割合に多い。

第1図 胞子飛散状況と薬剤散布



1. 開花期2回散布
2. 開花期1回散布
3. 幼莢期2回散布
4. 幼莢期1回散布
5. 開花1，幼莢1，汁2回散布
6. 開花2，幼莢2，汁4回散布
7. 開花1，幼莢2，汁3回散布
8. 開花2，幼莢1，汁3回散布
9. 対照無散布区

薬剤散布の方法を分生胞子の飛散状況と考へて実施した。ダイセーン粉剤のみで実施したが，本剤が現在本病の防除効果が顕著であつたため，開花期，幼莢期に1～4回散布した。1回の薬剤散布ではどの時期に散布しても無散布とは大差なく，2回散布では，開花期に散布2回，幼莢期に2回という様な纏めて散布した場合効果を認めているが，開花期1回，幼莢期1回という様な散布の方法は同じ2回でも効果は認められなかつた。これらは本剤の殺菌保護作用が1回散布では充分に抑制できぬ為かとも思われるが，詳細については，今後充分検討せねばならない。

開花期，幼莢期に3回以上散布した区が，一応効果を認めているのは，胞子の飛散時期に連続2回の散布効果のためと考えられ，開花，幼莢期の4回散布区が最も効果がよかつた。

尚，収量調査は実施していないが，経済的效果については今後，充分考へねばならぬ問題であらう。